街道物

二十二

街道をゆく

二十二

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十九年 三月 二十日 第一刷発行

街道をゆく 二十二

定価 一五〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八四年

0326―254962―0042
Printed in Japan

街道をゆく　二十二　南蛮のみち I

本書には「週刊朝日」昭和五十八年一月七日号・連載第五百六十八回から八月十二日号・第五百九十九回分までを収録。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

バスクとそのひとびと　7
カトリーヌ　9
カンドウ神父　23
ザヴィエルの右手　39
カルチェ・ラタンの青春　53
十六世紀の大学生　69
ロヨラの妖気　85

ザヴィエルの回心 101
夏の丘 117
回心という精神現象 133
ピレネー街道 149
コンチータ嬢 165
小さなホテル 181
バスク人たち 197
サン・ミシェル村 215
アンジェラスの鐘 231
巡礼宿 247

隣家のプレート 263
国境へ 279
パンプロナの街角 295
少数者と国家 311
日本発見 327
ザヴィエル城の出現 343
ザヴィエル城の手前で 359
ザヴィエル城の居間で 375
ザヴィエルの勉強部屋 391
アリバ村で 407

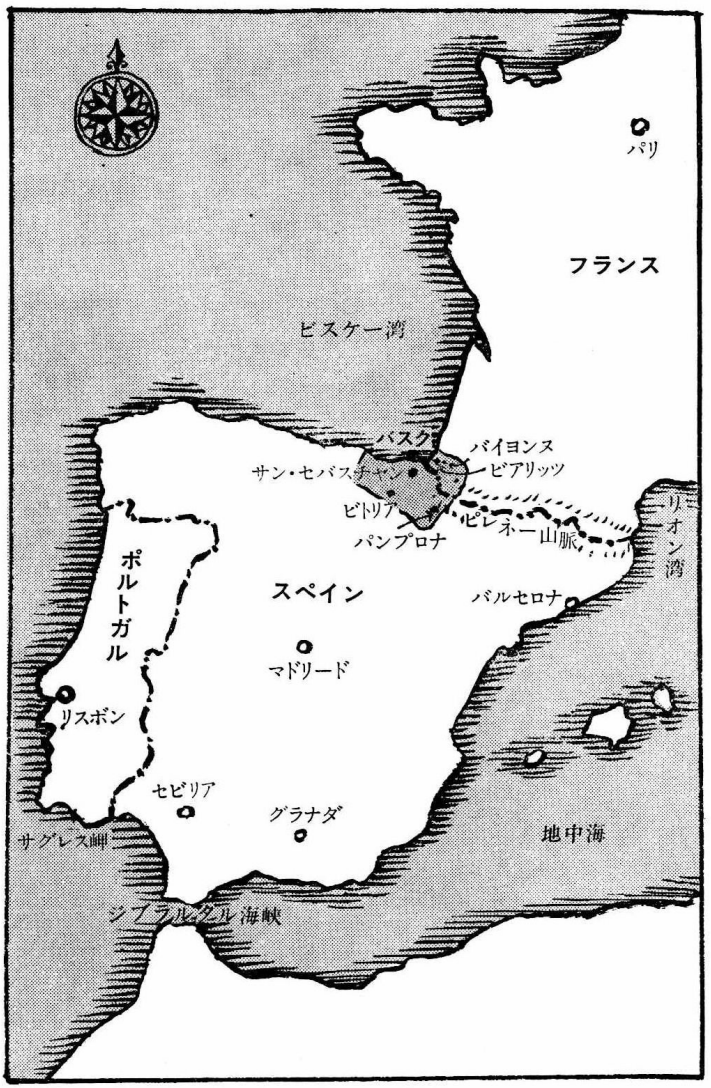
ピレネーの谷 425
ロヨラの風骨 441
サン・セバスチャンの夜 459
少数者の都へ 475
ビトリアのホテルで 491
バスクの大統領 507

題字＝棟方志功
え＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

バスクとそのひとびと

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

カトリーヌ


パリ
フランス
ビスケー湾
バスク
バイヨンヌ
サン・セバスチャン
ビアリッツ
ビトリア
ピレネー山脈
パンプロナ
リオン湾
ポルトガル
スペイン
バルセロナ
マドリード
リスボン
セビリア
グラナダ
サグレス岬
地中海
ジブラルタル海峡

「こんなホテル」

と、ロビイまで迎えにきてくれたカトリーヌ・カドウ嬢が、きれいな日本語でいった。

「いやだねえ、そばまできて、帰ろうかとおもった」

すでに、夜になっている。ちょうど四、五組の観光団が入ってきて、広いロビイが顔と荷物でごったがえしている。

ロビイは、合成の貼り床がてらてらと光っているし、その中央には模造品ながら二トンはある大理石のギリシア彫刻が据えつけられていて、床がめりこみそうである。

そのそばに、大きな円をえがいてパイプの脚のソファが配列されていて、どのソファも東洋人のこわばった顔が占拠している。カトリーヌ嬢との約束は、午後七時だった。彼女が表玄関の大きなガラス板のドアを体で押して入ってくるまでは、私の顔もその円形配列のなかにまじって宙にうかんでいた。どの東洋人の顔も日本語を喋る。しかしたがいに団体ごとにかたまっていて、他の団体の所属には会釈もしない。

ときどきアメリカからの一団が、にぎやかにロビイを横切ってゆく。日本語圏の東洋人が、きんちゃくの口を絞ったように顔の中心で緊張しているのに対し、移民でできあがった社会と広闊な国土をもった国のひとたちは、どの顔も遠心的にそとへひろがっていて、手足の動きまでが滑稽なほどにあかるい。

中近東の顔の夫婦二組が、すわっている。その夫婦たちの子供らしい女児二人、男の児一人が、放牧されたようにして床をかけまわっている。

――こんなホテル。

と、カトリーヌ嬢が軽侮するのは、パリにふさわしからぬアメリカ式のホテルという意味である。

彼女を不愉快にさせたのは、おそらくこのホテルの建設中からのことであろう。都市美は、まず市街の建物群が構成する秩序美であらねばならない。そこへゆくと、この高層な建物は周辺の建物群の平均的な地上高を無視し、日本式墓石そっくりの外観をもって他を圧している。パリの美観にうるさいこのまちの関係官公庁がよく許可したものだとおもえるほどに、外からみると図々しい。

――パリには、この町の伝統というべき粋で小さくて気分のいい古いホテルがたくさんあるのに、選りによってこんなアメリカ的機能主義そのもののホテルに泊まるとは。

という批難が、カトリーヌ嬢にはあるのにちがいない。しかし私はべつにパリ好きでもないし、こんどの旅も、パリを見たり感じたりすることが目的ではなく、不自由を我慢してまで、小粋なホテルにとまって古きよきパリを感じたいというつもりはない。

私は、ホテルは清潔で水道設備さえしっかりしていてくれればよいと思っている。その点に

おいてはこのホテルはわるくなく、他についてはなにも望まない。

ただ、部屋の窓から見おろすと、エッフェル塔と凱旋門というのが、セットになって一ツ視野のなかにおさまっているのには、閉口した。パリを絵ハガキ趣味の見世物として売りだしてやれという見えすいた商業主義が、このホテルの余分なもののひとつである。

帰ろうかとおもった、とカトリーヌ嬢がのっけにいったのは、そんな安手の商業主義に乗っかってやってきたやつと、わざわざ夜の貴重な時間をつぶしてまで食事をする必要はないとおもったのにちがいない。

しかし、パリを出発点にして他へゆこうとしている不馴れな通過者にとって、この種の巨大ホテルの安直さには、抵抗しがたい。客を選ぶことなく、客を団体として見、それらを呑吐(どんと)するだけがホテルの機能だと思っている思想は、現代文明の重要な普遍性の一部なのである。

安直さは、ロビイの雑踏にもあらわれている。放牧されているのはこどもたちではあるが、おとなたちも、貨車で運ばれてきて柵内に追いこまれたばかりの牛や馬に似ていて、疲れと安堵を顔じゅうにひろげながら牧童のつぎの指示を待っている。

私も、そんなふうにして、このまちのどこかからやってくるカトリーヌ嬢の来着を待っていた。

彼女が案内してくれた小ぶりなレストランは、ホテルから徒歩で十数分の街角にあった。二階へあがると、壁に血のような色の厚い布がぼってりと貼られているほかは気分のいい店で、階下も満員だったし、狭い二階も、めしを食うひと達の熱っぽい精気でむれかえっていた。

私はむかしから食事量がすくない。それに未経験の食べものへの冒険心にとぼしいために、同席者に快感をあたえることができない。せっかくパリにきてステーキでもないのだが、ともかくもその小ぶりなのを注文した。

この短を、須田画伯がつねにうずめてきてくれた。この夜も時差や旅の疲れというものは画伯の食慾には無縁らしく、おどろくばかりの多い量の食物を、みなが食前酒を飲みきっていないうちにたいらげてしまった。もっとも自己についての認識は詩的で、極端に食が細いと信じておられ、側の者が、そうでもないですよ、といったりすると、犬が嚙みつくような勢いで否定される。

私のこの旅の目的は、ごく単純でしかない。

日本で、南蛮文化とか南蛮美術、南蛮屏風、南蛮絵、南蛮鐔、南蛮菓子とかという「南蛮」とはなにかということをこの旅で感じたい、ということである。

日本では、ふるくから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com